

困難に直面している生徒に どう向き合うか

不安定な状況下では、日頃くすぶっていたさまざまな課題が表面化しやすく、生徒の悩みも多様化します。そのようななかから、特に対応に苦慮しがちな3つのケースを取り上げてみました。先生方は、どのように対処されるでしょうか？



ケース 1

自分の考えを持ってなかったり、言葉にできない1年生

先生：将来への希望や高校時代に取り組みたいことなど、アンケートにほとんど答えられていなかったみたいだけど？
 生徒：う～ん、特には…。
 先生：何かやってみたいこととか、興味があることとかは？
 生徒：……特に何も思い浮かばない。
 先生：最近だと、何に興味があるのかな？
 生徒：別に…。

経験を一緒に振り返り、認める。
丁寧なカウンセリング姿勢で臨む

何をしたいのかわからない、言葉にできないという生徒は少なくありません。特に、これまでに家庭でも学校でも周囲から認められた経験が少ない生徒の場合、自分の意思を示すことに不慣れで、



ケース 2

家庭の事情で、夢を諦めようとする2年生

生徒：進学を諦めて、就職しようかと思いだんだけど。
 先生：どうした？ 保育士になりたいって、ずっと言っていたよね。
 生徒：うち、シングルマザーで、お母さんすごく大変そうなの。弟もいるし。これ以上経済的に負担かけられないかなって思って…。

選択のプロセスに寄り添い、キャリアアプラン作りを丁寧に行う

夢を追うことも良いこととされている今の時代、本当になりたいものがある生徒は、何としてでもそれを実現させようとしています。その点、この生徒の課題は、意思の弱さやべつたりの親子関係、自立



ケース 3

貧困から自暴自棄になりかかっている3年生

先生：進路希望調査書に、保護者の方の署名がないみたいだけど？
 生徒：あ～。親が就職するなって言っている。うち、生活保護受けてて。俺が就職しちゃうと受けられなくなるから、バイトにしとけて。
 先生：バイトで一生、食べていくわけにいかないだろう？
 生徒：何とかなるんじゃないの？ なんか、どうでもいいし。

学校生活を通じて、ポジティブな感情を積み重ねる支援を根気強く実践

家庭にポジティブな環境がない生徒の場合、ネガティブな自己内対話が内在し、何を言っても「ああ、普通はそうなんですね。でも私はそうじゃないんです。やっぱり私はダメですね」と、何でもネガティブ



【監修&アドバイス】
会津大学 文化研究センター教授
荻間澤 勇人

かりまざわ・はやと ●1986年岩手大学工学部卒業後、岩手県の公立高校教諭に。早稲田大学大学院教育学研究科後期博士課程単位修得退学。教育学、教育カウンセリング心理学を専門とする。2015年4月より現職。

◀ ● ● ● ● ▶
<例えば、こんなやりとりへ>

先生：何かやってみたいこととか、興味があることとかは？
 生徒：……特に何も思い浮かばない。
 先生：そうか。中学時代、部活は何かしていたの？
 生徒：最初、卓球部に入ったけど、半年くらいで辞めちゃった。
 先生：でも、半年間は頑張ってたんだね。練習は大変だった？

何に興味を持てるかも見いだしづらく、進路選択がなかなか進まない傾向にあります。そこで、なぜ言葉にできないか理解していくためのアセスメントを、丁寧にカウンセリングやコーチング的に行うことが重要です。
 これまでにどのような経験をして、それがどんな結果だったか。このような生徒の場合、うまくいかなかった経験が多く、自己効力感が低い傾向にあるでしょう。しかし、話をしながらちょっとしたことでも褒め、「それはできたんだ」と認めていくことが大事です。経験を再構築する関わりによって、「褒められた↓興味がわく」と、関心が広がるきっかけとなります。同様に、学校教育のさまざまな場面で、スモールステップ式に成功経験ができるようにしてあげることが必要になります。

◀ ● ● ● ● ▶
<例えば、こんなやりとりへ>

生徒：うち、シングルマザーで、お母さんすごく大変そうなの。弟もいるし。これ以上経済的に負担かけられないかなって思ってる…。
 先生：そうなんだ。でも、どのくらいお金が必要かとか、奨学金とか、詳しいことは調べたのかな？
 生徒：まだ、あんまり詳しくは…。
 先生：じゃあ、先生がちょっと詳しく調べてみるから。その間、自分では、(キャリアプラン作成の宿題を出す)。

心の低さなどが考えられます。そのため、「もっと家族で話をしてみて」としてしまつと、結局、お母さんとの関係に引きずられて、何も変わらない結果となりそうです。そこで、改めて、本人が自分で意思決定できるように、キャリアプラン作りを丁寧に一緒に進めることが大切です。
 雑誌記事や映画・番組などでもいいので、保育士になった人の話を見聞きしてもらつたり、シングルマザーでも自分のなりたいものになっていった先輩の話聞かせてあげるなど、選択のプロセスに寄り添うことが大事です。また、経済的な問題もあるので、情報提供がとて重要になります。単に、こういう学校があるというのではなく、補助金制度や学費・生活支援制度の具体的な情報提供など、ソーシャルワーカー的な役割を担う必要があります。

◀ ● ● ● ● ▶
<例えば、こんなやりとりへ>

生徒：あ〜。なんか。親が就職するなって。俺が就職しちゃうと生活保護受けられなくなるから、バイトにしとけて。
 先生：そうか。そう言われて、どう感じた？
 生徒：え〜、まあ、仕方ないかなって…。
 先生：少し残念な気持ちがありそうだね。
 生徒：まあ、やっぱりみんなと同じように就職できないのは少し寂しいかな。
 先生：そうしたら、就職したときと、しなかったときでの、経済的な状況とか、一緒に考えてみないか？

ブになりがちです。まずは、「こういう生徒もいる」ということを理解し、本心ではもがいているかもしれないという立場から話を聞きましょう。さらに、個別の対応だけでなく、日常の学校教育の中で、例えばクラス全体で漢字検定に取り組むなど、集団の力を使ってさまざまにポジティブな環境を用意してあげることが大事です。やってみたら受かった、少し楽しいかも、を積み上げていく。運動面でも特別活動でも、ポジティブなベース作りが必要です。また、このような保護者は学校に不信感を抱いていることも多いので、一方通行でもいいので働きかけていく。漢字検定の合格証のコピーを保護者にも届くようにしたり、子どもの良いところを伝えたりして、「この先生はうちの子ども気にかけてくれる」と思ってもらつことが大事です。

ケーススタディに活かしている理論

「小さな一歩を踏み出す」を支える理論2選

前ページで取り上げたケースのように、特に困難に直面している生徒たちは、立ち止まり、後ろ向きになっていることがほとんどです。だからこそ、寄り添いながら、「小さな一歩を自分で踏み出す」後押しが大事になってきます。その基本となる理論を2つ、「ここでは取り上げて解説します。」

理論 1 アルバート・バンデューラ 社会的学習理論と自己効力感

社会との関わりによって 個人の課題の解決を目指す

困難に直面している生徒に共通しているのは、社会的な人間関係の希薄さです。他者との関わりが少ないので、他者から新しい価値観や情報を学べていなかったり、自分が成長していきなかつたり、自分が確立していないため、自ら意思決定して何かを選択するという力が育っていないと言えます。それはまさに、バンデューラが唱えた社会的学習理論に通じます。社会的学習とは、「他者の影響を受けて、社会的習慣、態度、価値観、行動を習得していく学習」を指し、バンデューラは特に、「モデリング(観察学習)」を提唱しました。職業人の話を聞いたり、オープンキャンパスやインターンシップに参加する

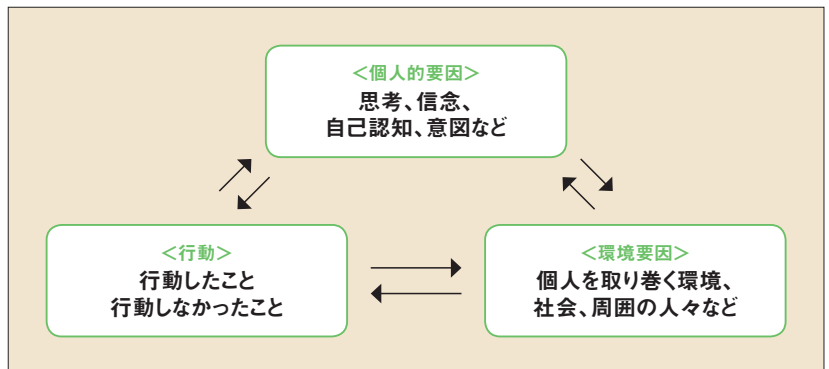
ことでイメージを膨らませていくのはもちろん、それが自分にもできそうだと思う「動機づけ過程」が、モデリングでは重要になるとバンデューラは説きます。この動機づけには、周囲から褒められるなどの外的強化の他、モデルに近づいていると思える代理強化、自分自身でやれそうだと決める自己強化などがあり、自分の内部から湧き上がる動機づけの重要性が示されています。

また、前ページのケース1や3のように、ポジティブなイメージを持つことができず困難に直面する生徒の多くは、自己効力感が低い傾向にあります。バンデューラは、この「自己効力感(セルフ・エフィカシー)」を高める方法として、主に「成功体験」「モデリング」「社会的説得」「心身状態の向上」の4つを挙げています。特に、「成功体験」では、大きな目標を不断の努力で達成していく体験だけでなく、簡単にできる小さなステップを踏んで成功体験を積み重ねるステップを踏んで成功体験も重要と唱えました。自己効力感を得るにはある程度の挑戦が必要になる一方、簡単すぎても難しすぎても続かないため、生徒によって、どのくらいのステップを提供するか判断する必要があります。前ページのケース1のような生

成功体験を確実に踏める 仕組みを用意する

つかることも多いということです。

図1 社会的学習理論における三者間相互作用



徒の場合で言えば、例えばクラス全員に朝1分間のスピーチに挑戦してもらうとして、他の生徒よりも少し余分に添削してあげて成功しやすくアシストするということも必要になるでしょう。さらに、あえて何かのリーダーを任せてみて、事前にリーダーとしての心得を伝えたり、みんなに内容を話すときの台詞を一緒に考えてあげるなど、成功させるための環境を整えることも有効な手立てになるでしょう。

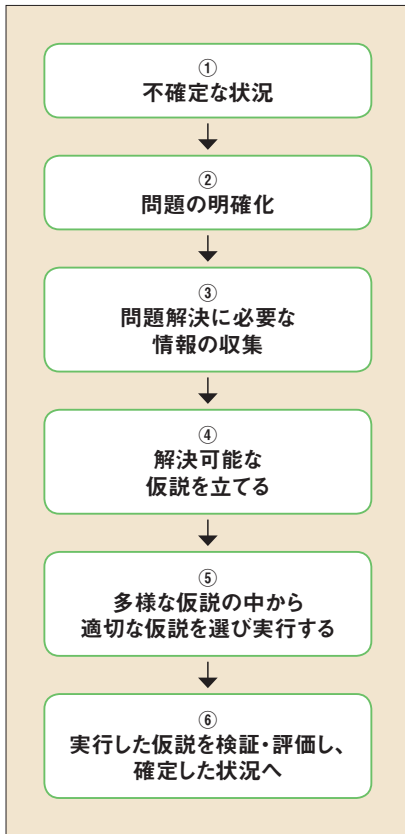
理論 2

ジョン・デューイ
問題解決のための思考過程

不確定な状況から
確定した状況へ移行させる

100年以上前に生まれたアメリカの思想家ジョン・デューイ。教育哲学や教育史でお馴染みです。デューイの実験学校では、実社会や実生活と切り離された「死んだ知識」ではなく、社会的に意味のある活動を中心に据えた教育を追求するという点で、問題解決型学習として現在のPBLや「探究」などにつながっています。デューイが提唱した問題解決のための思考過程(図2)は、厳しい状況に直面している生徒との相談にも活かすこ

図2 問題解決のための思考過程



とができます。例えば、ケース2のような生徒の場合、まずは家庭の経済的な問題や家庭の事情、保育士になる夢など、対立する「不確定な状況」があります。次に、その問題の実質は何なのか、単に表面に出ている状況だけでなく、生徒自身の保育士になる夢への自信のなさや、親子関係の課題など、さまざまに考えられる「問題の明確化」があり、それらの「問題解決に必要な情報の収集」として、経済的な支援情報やキャリアプランの作成などを通じて進路情報の収集にあたります。そして、「解決可能な仮説」を現実とすり合わせ

せながら立て、実際に進路決定していく「多様な仮説の中から適切な仮説を選び実行する」段階を経て、不確定な状況から「確定した状況」に変容させていくのです。

これらの順番は、ときに入れ替わりがあったり、同時進行で起こったり、また、「確定した状況」も絶対のものでなく、後に続く課題によって修正・変化させていくものになるとデューイは論じます。

経験の意味を振り返り
変化し続け成長する

また、デューイは、「教育は経験を絶え間なく再組織ないし改造することである」と説きました。そして、その「経験」は教室の中だけに閉じられたものではなく、日常生活や社会環境のなかで経験できるさまざまな事象との関連であると言います。特に、社会が大きく変化するなかでの、他者との関係やコミュニケーション、職業の変化との関連を、デューイは教育的視点から重視しました。それはまさに、バンデューラの社会的学習理論における、個人と行動、環境との相互作用にも通じる概念ではないでしょうか。

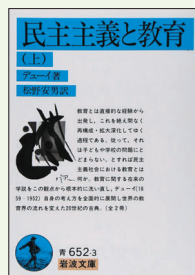
さらにデューイは、教育とは経験の意味を増加させ、その後の経験の進路を方向づける能力を高めるものであ

るとしました。それは、ケース1のような自己の経験を振り返り新たな意味を見いだす生徒にとつての、理論的背景としても参考になるといえるでしょう。

>> Book introduction



『新装版 社会的学習理論の新展開』
祐宗省三・原野広太郎・柏木恵子・
春木豊 編集
金子書房
バンデューラの研究を、その歴史的な変化とともに概説した一冊。日本における社会的学習理論の研究にも触れられている。



『民主主義と教育 上・下』
ジョン・デューイ著 松野安男訳
岩波文庫
1915年に書かれた教育論だが、現在の探究的で主体的な学びにも通じる概念が説かれている。